



近未来の高齢者たち 欲求と不安

H R I 社会研究部

二浦 彩子

本稿の目的

わが国では世界に例をみないスピードで高齢化が進んでいる。1950年、総人口の5%に満たなかつた65歳以上人口は、2000年には、総人口の17.5%に達し、15歳未満人口を初めて上回った。国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2014年にわが国は、全人口の4分の1が65歳以上という「超高齢社会」になるという。

この超高齢社会とは、どのような社会なのだろうか。この社会を予測するときに常につきまとう難点は、このような急スピードの高齢化がまったく前例のないことであり、今の高齢者をあてはめて、予測を立てることができない、という点である。なぜなら、超高齢社会が始まると同時に高齢者の人口に立つ世代、すなわち今の50代前半の世代は戦後の民主主義教育を受け、高度経済成長期の上り調子の時代を生きた点で、今までの高齢者とはまったく異なる価値観構造を持つ可能性があるからである。そのた

をする必要があるだろう。

こうした問題意識から、2001年夏、私たちは50代以上のシニア世代を対象にアンケート調査を実施した。分析の際には、50代の中でも、「団塊の世代」(1947~49年生まれ・アンケート調査実施当時52歳)54歳にあたる50代前半に、特に注目するよう心がけた。なぜなら、団塊の世代は約806万人という人数の多さゆえ社会的影響力の強い世代であり、これまで常に消費の牽引役、または新しい流行の担い手となってきたからである。彼らが従来の高齢者のイメージを塗り替える役者になる可能性は高い。

はたして団塊の世代は、どのような価値観、意識を持っているのだろうか。彼らが高齢者になったとき、問題になってくるのはどのようなことだろうか。以上を考察することを本稿の目的としたい。

団塊世代の特徴

アンケート調査の結果、50代前半にはつきとりと特徴的な結果が表れた。それは次のような性質である。

所とする人、「家庭人」としての立場を最重視する人、いずれも50代前半が全年代で最も多い。

「内向き親密派」

楽しみは「交流」、誇りは「自分の能力より自分の周りの人」。「家族」や「気の置けない友人」など、親密な人とのつながりを大切にする傾向が強い。しかし、親密な交友関係に思い入れが強いのとは対照的に、社会的な活動グループへの参加率は低い。ボランティアや、地域活動に対する興味・関心も非常に低い。

「質素儉約」

「今の楽しみ」では「旅行(特に海外旅行)」は低位。「外食」「お酒」という回答率も他年代に比べて低く、レジャーにお金をかけていない質素な印象を受ける。「10年後の楽しみ」においても同様。

「高い教養欲と低い仕事欲」

「これからやりたいこと」では「学び」が突出して高い。しかし、仕事に対する意欲は低く、60歳以降の就業希望率、希望退職年齢は全年代の中で最も低い。

「低い自信」

「能力」関係を誇りとして挙げる人は少ない。仕事の動機でも「自分を生かす」という発想は少ない。

通常「団塊の世代」は「上昇志向が強い」

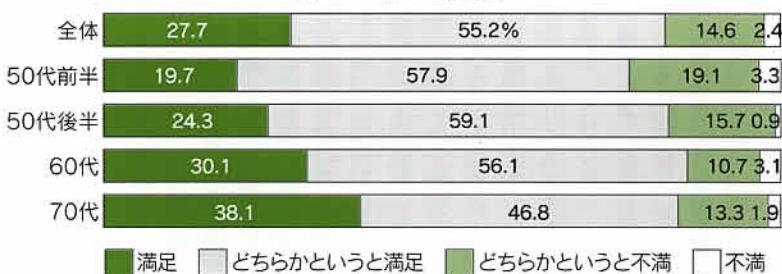
「好奇心旺盛」「社会派」「行動力とバイタリティに富む」などといわれることが多いが、それを誇りとする人、「家庭」を居心地のよい場

不満と不安の構造

不満要因は「経済」

アンケート結果によると、50代前半の抱えていた最大の不満は「経済」面での不満

図1 生活の満足度



だといえる。図2は日頃の生活について「満足・どちらか」というと「満足」と回答した人の要因(満足要因)と「不満・どちらか」というと「不満」と回答した人の要因(不満要因)をクロス分析した結果である。満足要因は「健康」と「家庭」が主であったが、不満要因は「経済的なゆとり」が圧倒的に多く、50%近くを占めている。そして次に多いのが「職場での仕事」(約15%)であった。

ベースにある不安感

この50代前半の最大の不満要因である「経済」は、そのまま彼らの不安要因でもある。彼らの経済不安を表すデータは枚挙にいと数えきれない。

いとまがない。5年後、10年後の生活の不安について聞いたところ、「経済的な不安」という回答率は50代前半が全年代の中で最も高い。介護に関する不安においても、「経済面」という回答が50代前半に最も多く53%を占める。また、子どもに財産は残さないと決めている人がいちばん多いのもこの年代である。

仕事不安が経済不安に

なぜ経済不安はこれほど高いのだろうか。

その状況について考えてみたい。

まず、50代前半はライフステージの特徴として、子どもの大学の学費、親の介護、病

気など出費が多い年代だということがある。また、年金制度改変によって年金の満額支給が65歳から延期されたことも、不安を増幅させている一因であろう。

しかし、何よりも大きいのは、「仕事不安」が理由となって発生している「経済不安」ではないだろうか。具体的にいえば「リストラ」「失業」「収入がなくなる」という不安の構図である。アンケート結果によると50代前半の40%近くが「仕事」「職場」に不安を感じているのである。

不景気の中、中高年に厳しい雇用情勢が続いている。特に団塊の世代は人数が多いだけに、リストラの格好の標的となっている。リストラ旋風が吹き荒れ、「成果主義」「社員の自律」などという言葉がはんらんする中、よりどころとなるのは自分の「能力」だ。

しかし、団塊の世代の多くはその肝心の「能力」にあまり自信を持っていないようである。

アンケートを通してみると、50代前半の「能力自信」の低さは明らかである。自分の誇りにしているもので「仕事の実績」を選ぶ人は28.7%と、50代後半の46%に比べ大幅に少ない。また、60歳以上になつたとき働く理由として「自分の能力を生かしたい」を挙げる人はわずか3.4%である。

しかも、彼らは「仕事」に対して非常に醒めているように見える。50代前半の「生きる張り合い」では、「仕事」は「家族」「趣味」に次いで3位だった(ちなみに50代後半は「仕事」が1位)。また、居心地のよい場に「職場」を選ぶ人、「組織人」としての立場を重視している人、どちらも他の年代に比べて大幅に少ない。

不安から濃厚なマイホーム主義へ

彼らはこのよくな強い「不安」に、どのように対処しているのだろうか。「不安」を抱えている状態にいると、必ずそれを消したいという「欲求」が生まれるという(注)。この「打ち消し欲求」は彼らにどのようなかたちで表われているのだろうか。

「経済」と「仕事」をめぐる緊張感はどうやらはらに、彼らが強い安寧感を感じているのは「家庭」である。

「生きる張り合い」を聞いたところ、50代前半には非常に強い家庭志向の傾向がみられた(図3)。また、居心地のよい場で「家庭」を挙げる人は93.8%、家庭人としての立場を重視する人は91.7%、どちらも他の年代に比べて非常に多い。

彼らの「家庭」に対する安寧感の強さをみていると、家庭が「シェルター」として機

図2-1 50代前半 満足の要因

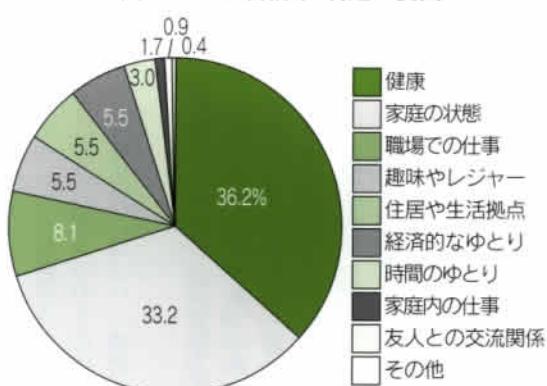
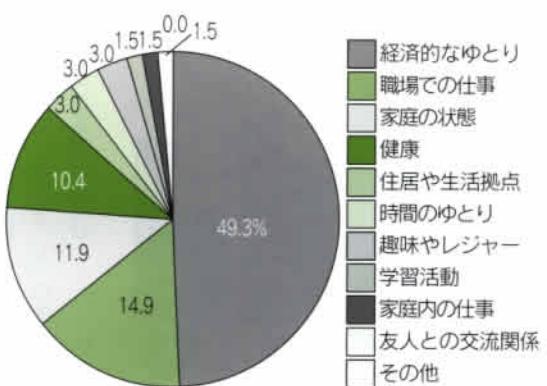


図2-2 50代前半 不満の要因



能し始めたように思えてくる。彼らは、仕事を没入するよりも、仕事から距離を置き、家庭に安息を求めるかたちで、不安の「打ち消し」を図ろうとしているのではないだろうか。

旺盛な「学び欲」

アンケートを見ていると、50代前半が、他年代に比べて際立つ「学び欲」が高いことに気づかれる。「これから打ち込みたいこと」では、「知識や教養、技能を身につけるために学ぶ」の回答率が全年代の中でも高い。また、生活の「不満」要因に「学習活動」が挙げられているのは、全年代で50代前半だけである。

アンケートに「学び」の内容について尋ねる質問はなかつたが、「10年後の楽しみ」に対する回答をみると「生涯学習」「芸術鑑賞」などが多く、「仕事に役立つ技能の修得」は少ない。そのことから、仕事で役に立つ学びより趣味的な学びに対するニーズが高いのではないか、と思われる。

50代前半を性差でクロス分析にかけると、50代前半の中でも、特に女性の学び欲が旺盛であることがわかる(図4)。彼女らは能力への自信も他の年代の女性に比べて極めて低い。このコンプレックスが彼女たちの学び欲のバネになっているのではないかと思われる。

欲求の構造と原因

引き裂かれた欲求

50代前半の欲求について、二つの類型を

肥大化した「期待感」

私は、その理由は「漠然とした期待感」の高さではないか、と推測している。この「漠然とした期待感」というものが本当にある

抽出することができた。一つは経済不安から発生する「不安の打ち消し欲求」、もう一つは文化、教養に対する「学び欲求」である。この二つの欲求は両方とも非常に高い。

その理由は、前者に関しては、彼らが抱いている「不安」の大きさに起因すると考えられる。それでは、「学び欲求」が高い理由は何だろうか。

図3 生きる張り合いを感じるとき(MA3つまで)

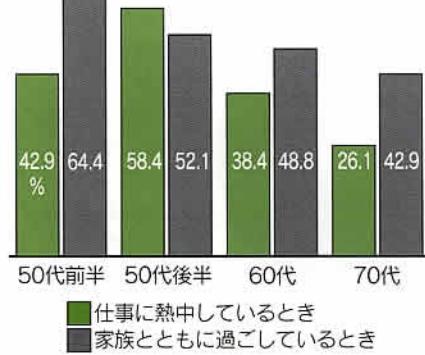


図4 これから打ち込みたいこと
「知識や教養、技術を身につけるために学ぶ」
の回答率(MA3つまで)

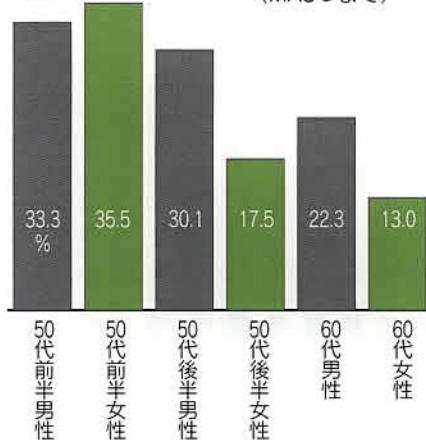
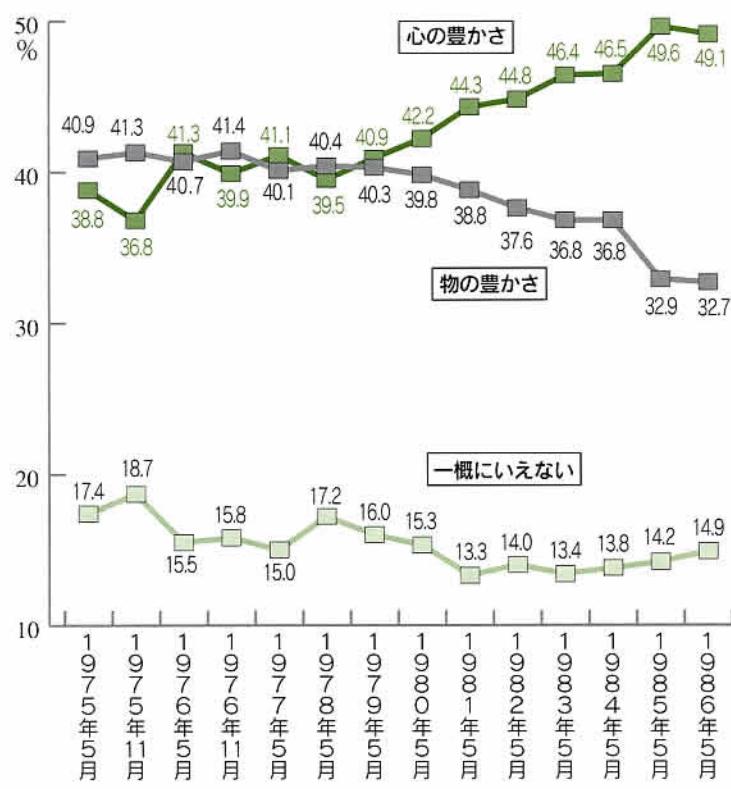


図5 心の豊かさ、物の豊かさ



出典：総理府（現内閣府）「国民生活に関する世論調査」

とすれば、それはどのようにして培われたのだろうか。

私は、その契機は「物から心へ」という価値観の転換期にあったのではないかと考える。団塊の世代は、高度経済成長期に幼年期を過ごした。物がどんどん増え、昨日より明日のほうが豊か、という上り調子の中で育ち、金の卵として就職し、ぱりぱり働いた。そこに、突然大きな転回点が訪れた。それは「物の豊かさよりも心の豊かさへ」という価値観の転換であった。

「物の豊かさ」と「心の豊かさ」のどちらを重視するか、を問う世論調査（図5）で、それまでずっと高かつた「物の豊かさ」に対して「心の豊かさ」が上昇し、両者が拮抗の始まりが1976年。しばらく拮抗の後、80年代に入り「心の豊かさ」が「物の豊かさ」を完全に上回った。

「心の豊かさ」とは非常にあいまいな言葉である。「物の豊かさ」に比べ「心の豊かさ」に具体的な指標は何もない。この「心の豊かさ」という言葉が、意味もはつきりしないまま使われ、急速に流布し始めたこの頃、団塊の世代の年齢は20代後半から30代前半。結婚し、子どもが生まれ、仕事に脂が乗つてくる時期であった。その頃、彼らはこの価値観の転換に、どのような影響を受けたのだろうか。

この新しい価値観は、新しい「期待」と「あこがれ」を、彼らに植えつけたのだと思う。「心の豊かさ」という言葉がわかりにくければわざわざいくほど、「なんだかわからぬけれど素晴らしいものがあるはず」「それを大切にしなくては」という期待とあこがれは肥大していった。

その「期待感」こそ、今の団塊世代の「学び欲」の根源ではないだろうか。女性の学び欲がひときわ高いのは、女性の「もっと素晴らしい世界があるはず」という期待が、1977年の『クロワッサン』の創刊、1984年の齊藤茂男『妻たちの思秋期』などに後押しされて、「ただの主婦で終りたくない」「自立したい」「学びたい」という方面的の「欲求」に変化したせいだと思われる。

では、男性はどうだったのか。男性の場合、その「期待」は仕事以外に価値を見いだす生活、具体的には家庭を大切にする生活や、趣味に生きる生活への「あこがれ」に変化したように思われる。これが今のマイホーム主義の礎となっているのではないだろうか。当時流行したマンガ「釣りキチ三平」や「ニューファミリー」という家族スタイルは、会社一辺倒ではない生活をしたい、という彼らの欲求を象徴しているように思われる。

今後の可能性

今後、この「不安」と「漠然とした期待感」が、ステップアップのバネになるか、それとも不満をくすぐらせる火種のまま終るか、それはこれから「仕事」と「学び」、そして「家庭」にかかるかに思われる。

アンケート調査によると、年代が上がるについたがい家庭志向は弱くなり、家庭への不安も強まっていく。しかし、そうした将来の変化を予想させないほど、50代前半の家庭志向は強い。

「家庭」のとらえ直し

アンケート調査で同居状態を聞いたところ、50代前半の70%以上が、まだ子どもとは「友だちのような関係」干渉せず、必要なときだけ助けあう関係」という、他の年代にはない特殊な傾向がみられた。つまり彼女たちは、まだ子どもたちと同居し、友だちは、いまだ子どもたちと同居し、友だちのような親子関係の「友愛家庭」を築いているものと考えられる。

これから先、子どもが独立することで、彼らの家庭にも何かしらの変化が発生すると予想される。しかし、そうした「子どもの独立」は今後、抑制されていくだろう。高齢者人口の増加に伴い、若年層の就職難が続いている。この問題が今後、解決されなければ、親と子の同居ケースはますます増えて

していく、一方で「家庭」は「生きがい」に近すぎるような印象を受ける。このアンバランスを解決させるには、「働く」ことに対しても、新しい意味、価値観を付加する必要があるようと思われる。

注目すべきは「これから打ちこみたい」と「やりがいのある仕事をしたい」という回答が50代前半に多く見られたことである。この願いは彼らの「学び欲」の強さと結びついて、新しい「働き」のかたち、また、新しい「学び」のかたちを生みだすかもしれない。

「家庭」のとらえ直し

アンケート調査によると、年代が上がるについたがい家庭志向は弱くなり、家庭への不安も強まっていく。しかし、そうした将来の変化を予想させないほど、50代前半の家庭志向は強い。

アンケート調査で同居状態を聞いたところ、50代前半の70%以上が、まだ子どもとは「友だちのような関係」干渉せず、必要なときだけ助けあう関係」という、他の年代にはない特殊な傾向がみられた。つまり彼女たちは、まだ子どもたちと同居し、友だちは、いまだ子どもたちと同居し、友だちのような親子関係の「友愛家庭」を築いているものと考えられる。

これから先、子どもが独立することで、彼らの家庭にも何かしらの変化が発生すると予想される。しかし、そうした「子どもの独立」は今後、抑制されていくだろう。高齢者人口の増加に伴い、若年層の就職難が続いている。この問題が今後、解決されなければ、親と子の同居ケースはますます増えて

いくはずだ。その場合、従来いわれているような、経済的に豊かな親とそれに依存するバラサイト・シングルではなく、経済的に不安を抱えた親と子が生活費を節約することを目的に同居し続けるケースが主流となってくるだろう。この傾向と「友だち親子」志向が合わさって、前の世代にはみられない「友愛・助けあい家庭」が形成され、新しい典型となっていく可能性がある。

この新しい家庭は、シェルターとしては申し分なく機能していくだろう。しかし、この家庭には、いつまでも「変化しない」という点で問題がある。そのため、痴呆、病気、死別など、いきなり訪れる大きな変化に対する心配がある。また、「家庭」いう場が確保されている安心から、それ以外の共同体に対しても興味が薄くなるとすれば、それも問題である。若いうちは意識しなくとも、友人や会社を通して社会とつながりを持つことができる。しかし高齢になれば、意識して行動しない限り、社会とのつながりは徐々に薄くなっていくはずである。社会とのつながりを絶ち、「家族だけが生きがい」という状態になつて生きるのには、今の平均余命は長すぎる。

家庭以外の「共同体」は、はたして生み出されるのだろうか。社会活動、ボランティアなどに興味の薄い彼らが、どのような共同体を形成していくのか、予測するのは難しい。しかし、そこでカギになつてくるのが、先に述べた彼らの「学び欲」の強さであることは確信している。



シニア夫婦3つの関係性 ハッピーなシニアライフを送るために

H R I 社会研究部

山縣 いつ子

33人のシニアにインタビュー 調査の概要

今回の「シニアライフ研究」では文献調査、アンケート調査のほかに、33名（50代～70代）のシニアに対して、インタビュー調査を行った。

調査の目的は、文献調査、アンケート調査の結果をさらに深めるため、また両調査ではみえてこない項目（ライフヒストリー、生きがい、家族関係、人生の転換期）などについて、インフォーマントの生の声を聞くことによって、明らかにするためである。インフォーマントの選択は、年代（50代前半・後半、60代、70代）、性別（男・女）、居住地（首都圏在住・地方在住）などを基準に行つた。なお、50代を前半・後半に分けたのは、50代前半が「団塊の世代」のセグメントに含まれるためである。

また、特に「同年代が持つさまざまな問題意識をさらに深堀りし、先鋭的な活動に取り組む人」をフロントランナーと称し、一般インフォーマントとは区別して、6名にインタビューを行つた。

今回の「シニアライフ研究」では文献調査、アンケート調査のほかに、33名（50代～70代）のシニアに対して、インタビュー調査を行つた。

一般的のインフォーマントは合計27名。首都圏在住・男性12名、女性9名。地方在住・男性3名、女性3名という内訳である。

シニア夫婦3つのタイプ 調査からみえてきた

調査結果からは年代、性別、職業などでさまざまな特徴が出てきた。しかし、ここでは時代の流れとともに大きく変化したシニア世帯のあり方として、「シニア夫婦の関係性」について触れたいと思う。今後、子どもとの同居関係が薄れていく傾向の中で、夫婦の関係性が日常生活で最もウエートを占めると思われるからである。

シニア夫婦の関係は、これまでの夫婦の歴史があることから、配偶者との関係性だけを見るのではなく、かえってわかりにくくなる点を考慮し、本人を中心に、子どもの関係、友人や仕事、趣味に対するインタビューアンswersなどを加味した上でとらえてみたい。

また、今回のインフォーマントのうち、独身者2名を除く25名の中から、特徴のある夫婦間のかかわりあいの度合いが若干異なる。

お互いのやりたいことをする（図1） (A) 別行動尊重型

「お互いに今が本当に好きなことができる時間があるので、それを尊重しあって楽しんでいる」（65歳男性／会社員・海外ボランティア）という男性は、現役の職場を引退後、同職種で別の職場と契約して働いているほかに、海外ボランティアに注力している。配偶者は近所で託児施設の手伝いをしている。自分たちが年老いたときの生き方などは互いに話しあうが、基本的に現在やりたいことは異なるので、互いの行動を尊重しあっている。

また、10年前に事業を辞めて引退した夫を持つカウンセラーは「私は毎日のようにカウンセリングの仕事があります。夫は元気なのでゴルフを楽しみにして、しようと出かけている」（74歳女性・カウンセラー）と、かつては夫の事業を手伝いながらボランティア活動をしていた時期もあったが、現在は本格的にカウンセラーの仕事を打ち込んでいると話す。

このように、夫婦が互いに別の趣味や仕事でやりがいを見つけ、別々に行動をすることを尊重しあっているタイプを見いだした。

「行動」「人間関係」を共有する（図2） (B) 共有型

「行動」や「人間関係」を共有するという点でいうと、その最たるもののが「共に仕事をする」ということになろう。今回の調査では、家業として、夫婦で一緒に仕事をしているインフォーマントが、第一次産業従事者6名、手焼きせんべい職人、郷土料理店経営と計8名いた。しかし、中には夫婦であつても、それぞの仕事への意識の度合いが異なる場合もあるので、ここでは仕事への意識が同等であろうと思われる例を挙げる。

「長年一緒に仕事をしてきているので、妻がいちばん頼りになる。よく話もするし、いつも一緒にいても気詰まりではない」（66歳男性／手焼きせんべい職人）という男性は、50余年、配偶者と共に老舗の手焼きせんべいの店を二人三脚で切り盛りしてきた。イ

るAタイプがあることも見逃せない。

「妻はコーラス、書道など趣味が多く、交際範囲も広い。将来私は、自然豊かな田舎で暮らしてもいいと思っていて、妻はデパートがなければ暮らせないと言っている」（62歳男性・監査役）や、「妻はお茶、水泳、ゴルフなど、とにかく多趣味。私は共通の

ンタビューには配偶者も同席していたが、「サラリーマンの家から嫁いできて、右も左もわからない私を、一から仕込んでくれたのは主人。よくできた人なので、いろんなことをしゃべっても、じっくり聞いてくれる」と発言している。

「義父が引退してから、本格的に漁業にかかわったが、一緒に仕事をするようになってから夫との会話を増え、それまでの不安が解消された。夫から仕事のやり方をすべて教わり、今もまだ教えてもらっている」(59歳女性／漁業・のり養殖)という女性は、自分が本格的に漁業にかかる前の夫婦関係から、仕事のパートナーとしてのつながりへ変わったことを強く意識している。

以上の例は、「仕事」という大きな目的に向かって、夫婦が共に同様の意識を持ち、さらに生活におけるバランスが取れている場合に見えるようである。

また、仕事以外に行動や人間関係を共有するという意味では「趣味や友人」が挙げられる。これは、仕事と異なり、明確な目的ではないが、これらを意図的に共有することで2人の関係を築いている夫婦もいる。

「お互いの仕事の関係で、夫はふだんは別居しているが、月2回ほど帰宅する。ほどほどのよいつきあいができる」と感じられている」(62歳女性／薬剤師)という女性は、現在、互いの仕事の関係で別々に暮らしているが、ときどき帰つてくる夫と銭湯や娘の家に行くことが楽しみであるといふ。「夫は朝6時過ぎには出社し、私は夜遅くまで働いているので、平日は一緒に過ごす時間はあまりない。週末は一緒にゴルフやコースの練習に行つたりして、なるべく

共通の時間を持つようにしている」(54歳女性／会社員)と話す女性は、配偶者との間に子どもがいないので、若い頃から意識して行動を共にする、夫婦をよく知る友人を多く持つ、ということで共有性を高めてきた。

互いに向きあう時間や場がなく、不満を抱えている（図3）

(C) 乖離型

男性が仕事や他の趣味に没頭し、家庭を頼みず、一方で、女性が家庭の外に趣味や仕事のような楽しみを見いだせず、子どもとのかかわりが深くなると、夫婦関係に団3のような乖離が生まれやすいようである。「妻が子どもたちを抱え込んで一緒に行動しているので、家族との接触時間が短い」(54歳男性／外資系金融会社勤務)と話す男性は、仕事はもとより、幅広く趣味や交友関係を持ち、いずれも意識的に力を入れている。何事も理想を高く持ち、配偶者にも自己成長を求めていたが、十分に手ごたえを感じていない。

「子どもはわりと近くに住んでいて、妻はショットちゅう行き来している。妻が過剰なほど世話を焼くので、自分はむしろ引くようになっている」(58歳男性／研究員)という男性も、妻と子どもの関係に介入しない、もしくは介入できないというもどかしさを抱えている。

ライフサイクルの変化による夫婦関係

本研究のアンケート調査結果において

図1 お互いのやりたいことをする

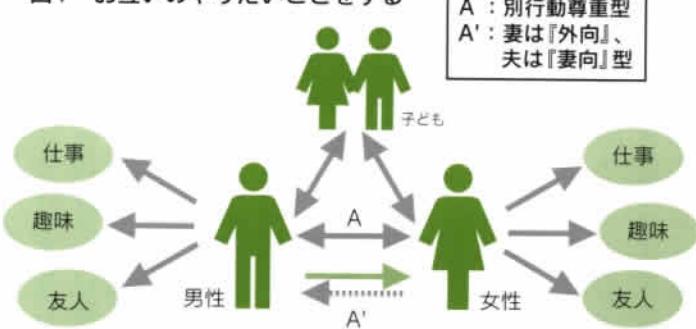


図2 「行動」「人間関係」を共有する

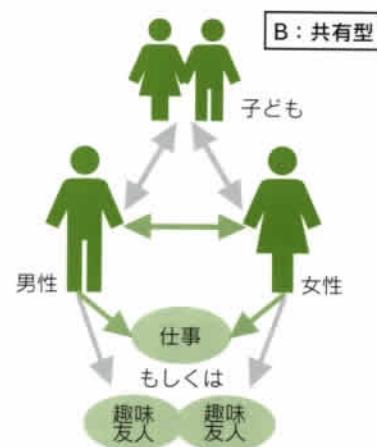
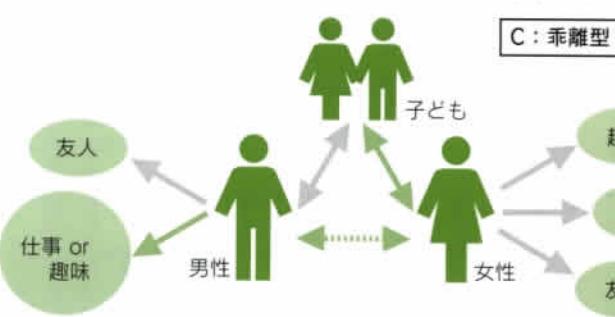


図3 向きあう時間や場がなく、不満を抱える



以上の3つのタイプはあくまでも現在の関係性である。年代が上がるにつれて、家族は変化するので、それによって、おのずと夫婦の関係性も変わってくる。しかし、その「変化の時期」に、夫婦関係にとつて何がけの生活がスタートすることを示している。また、この時期はちょうど夫の定年にも重

なると「独居」もしくは「2人」で住む人が増加しており、逆に70代では独居か、大人化进程サイクルに変化が起り、夫婦2人だけの生活がスタートすることを示している。

図4 同居人数(本人も含む)



れより気ままに夫婦で暮らしたい」(54歳男性／植木職人)という意見にみられるよう、2人だけの世帯も増加してくるであろう。となるとやはり、多くのシニア夫婦が、どこかで夫婦関係を見直す時期を迎えることは想像に難くない。では、夫婦関係を構築していく上で、何が大きな要素となるのか。ここで次の2点について考えてみたい。

配偶者への満足度は「妻よりも夫のほうが高い」

本研究のアンケート調査の中に、10年後

図5 10年後に配偶者と同居したい既婚者の割合



前述のライフサイクルの変化の時期に大きな要因となるのが、「仕事」「生活」における性別役割である。

戦後、第二次産業の著しい成長の中で、夫は会社員として外で働き、妻は専業主婦という勤労世帯が急増した。その夫が定年後は、再就職するにしろ、引退するにしろ、新しい職場や生活習慣に適応していかなければならぬ。妻にとっても夫が定年後の生活に無事に適応できるように、なんらかの配慮が必要となる。また、従来の性別役割分業を前提にしている一般的な家庭では、夫が引退した場合には妻の家事負担が増大する可能性が高い。

ここで肝心なのは、「妻は家事・育児、夫は外で稼いでくるもの」という役割分担に對し、お互いが満足しているか否かということである。

夫の年齢が60歳以上のシニア夫婦に対して、家事負担と生活の満足度の相関を調べた調査がある(ライフデザイン研究所「高齢男性の夫婦関係」60ページ／1999年)。

この調査では、前述の役割分担を夫婦が共に納得して担っているカップルと、お互いに満足度が高く、互いの役割分担に対してもいえる。

現在の70代は子どもたち世代との同居を望むケースが多いが、今後は「世代の調整をしながら生活するのはうつとうしい。そ

れより気ままに夫婦で暮らしたい」(54歳男性／植木職人)という意見にみられるよう、2人だけの世帯も増加してくるであろう。となるとやはり、多くのシニア夫婦が、どこかで夫婦関係を見直す時期を迎えることは想像に難くない。では、夫婦関係を構築していく上で、何が大きな要素となるのか。ここで次の2点について考えてみたい。

これは、他の文献、調査結果などとの整合性も高い。つまりシニア夫婦の関係では「配偶者への満足度は妻よりも夫が高い」というのが、いわば定説になっているのだ。これはなぜだろう。

これはなぜだろう。

前述のライフサイクルの変化の時期に大きな要因となるのが、「仕事」「生活」における性別役割である。

戦後、第二次産業の著しい成長の中で、夫は会社員として外で働き、妻は専業主婦という勤労世帯が急増した。その夫が定年後は、再就職するにしろ、引退するにしろ、新しい職場や生活習慣に適応していかなければならぬ。妻にとっても夫が定年後の生活に無事に適応できるように、なんらかの配慮が必要となる。また、従来の性別役割分業を前提にしている一般的な家庭では、夫が引退した場合には妻の家事負担が増大する可能性が高い。

「伴侶性」「生きがい一致度」が満足度に影響

夫婦が経済的共同性を基盤にして、相互の人格を認めあいながら生活目標を共有し、生活全般にわたる行動の共同性もしくは協調性を持つことを、「伴侶性(Companionship)」と呼ぶ。定年退職後の夫婦を対象にした調査では、この伴侶性が高いほど、配偶者への満足度が高いという結果が出ている(袖井孝子、都築佳代「定年退職後の結婚満足度」「社会老年学」22・63／77ページ／1985年、高橋正人「老夫婦の配偶者満足度」「社会老年学」33・15～25ページ／1991年)。具体的には

方にギャップが生じているカップルは、生活の満足度が低いことが証明されている。つまり、ライフサイクルが変わった時点でも、互いの役割分担を再認識し、家事などの分担を決め直すのか、それとも、その後も継続して「妻は内、夫は外」の役割をまつとうするのか、その選択が2人だけの生活となる日々の満足度を上げることにつながる。たとえば、夫だけ「定年を迎えたから悠々自適」と、家から一歩も出ないで、家事もない、つまり何も「変わらない」というパターンは妻の不満を増大させやすい。それが不満にまで至らなくとも、妻が夫の生活的自立と生きがいを見つけることを望んでいるのは、妻自身がすでにそれらを外で見つけ、楽しみを見いだしているからといえる。これは前述のAタイプにあてはまるといえるだろう。

会話」などの行動次元における伴侶性である。

そうなると、前述のBタイプのようになると、同じ仕事をする場合でも「夫婦2人での家内労働のため、仕事以外の時間は、それぞれが別々の生活スタイルを持つている。夫は自分の趣味の仲間との時間を大切にし、私は自分のボランティア活動や子どもとの対話を大切にしている」(54歳女性／酪農業)と話す女性は、夫に対しても「もう少しこちらを向いてほしい」という気持ちがあるようだ。このように同じ目的を持っていても、夫婦関係に微妙な乖離が起きる場合がある。これはなぜか。

60歳以上のシニア世代に向けた夫婦の生きがい(仕事・趣味・スポーツ・学習活動・交流など)の一一致度が伴侶性とどのような相関があるかをみたデータによると(ライフデザイン研究所「高齢男性の夫婦関係」33歳～34ページ/1999年)、生きがい一一致度が高くなるほど、夫婦の伴侶行動も増加するという相関関係がみられる。

このように、伴侶行動といつても、お互いの目的意識が同等であり、思い入れが同じくらいでなければ、伴侶性も高まらないことがわかる。前出の酪農業の夫婦については、行動は一緒でも、互いの生きがいが一致していないところからすれば違ったことがある。前出の酪農業の夫婦にして身を立てるつもりがなかったが、父が病気で倒れたことから、後を継がざるをえなかつた。彼が本気で職人として仕事に打ち込み始めたのは「妻と結婚し、子どもができるのではないだろうか。

また、逆に行動レベルにおける伴侶性が低いと思われるAタイプは、互いにやりたいことをしながらも、夫婦が共有できる趣味や時間を持っていることが特徴であり、

互いのフィールドからのフィードバックが刺激となって伴侶性が高まっているのである。

理想のシニア夫婦像とは？

これまでのことを踏まえると、今回のインタビュー結果からみて、結婚生活の満足度が大きいと思われるのは、Bタイプであるといえよう。伴侶性の高さが大きく影響しているのは前述の通りである。

また、Bとは一見、逆と思われるAタイプにしても、行動レベルが違うことがかえって互いの刺激となり、尊重の気持ちを持ちやすい。これは、特に性別役割が互いに満足している高齢の夫婦の場合にあてはまる。いわゆる「苦楽を共にしてきた」という情緒の次元で伴侶性が働き、別々の行動をとっても、互いを尊重するからではないのだろうか。

しかし、AタイプにしてもBタイプにしても、夫婦が互いに心地いい関係をつくるためには、それなりに準備が必要である。老年期にさしかかったところで、ハタと気がつくとも、おいでそれと築くことはできない。実際にAもしくはBにあてはまるシニア夫婦は、それなりの関係性を築いてきている。前出の手焼きせんべい職人は元々職人とみるとみることができる。前出の酪農業の夫婦については、行動は一緒でも、互いの生きがいが一致していないところからすれば違ったことがある。前出の酪農業の夫婦にして身を立てるつもりがなかったが、父が病気で倒れたことから、後を継がざるをえなかつた。彼が本気で職人として仕事に打ち込み始めたのは「妻と結婚し、子どもができるのではないだろうか。

また、逆に行動レベルにおける伴侶性が低いと思われるAタイプは、互いにやりたいことをしながらも、夫婦が共有できる趣味や時間を持っていることが特徴であり、

嘗む59歳の女性にも共通している。彼女は、義父の引退をきっかけに、夫と共に海へ出たときに見直すべき点は、生活における「性別役割」と行動レベルの「伴侶性」である。

ナーシップを持って仕事に打ち込んできた。両者に共通するのは、互いにパート歴史が長いということであろう。

Aタイプにしても、海外ボランティアに打ち込む男性は、現役時代から常に人間関係を広めており、ボランティアに興味を持っていた。配偶者もそれに刺激されて、結婚前の仕事であった幼稚園教諭の資格を生かし、積極的に近所の託児所で仕事を請け負う。74歳女性のカウンセラーも、10年前に引退したとはいえ、結婚してからずっと夫の事業を支えてきた。このように、やはりどこかで共有するシンergieを持っている。

だが、今回のインタビュー対象者が、現役・OB世代を含めて会社員が約8名いたことからもわかるように、シニア世代には、就労人生の大半をサラリーマンとして過ごしてきた人々が、夫婦2人世帯になつたときに、これまでの意識を変革してお互に向きあう意志を持てるのだろうか。定年というわかりやすいタイミングがあるにせよ、そこまでは通常どおりの仕事生活を送ってしまいがちになるであろう。

生活における「性別役割」では、単に家事を分担すればいいということではない。前述の通り、互いが役割に対してもどこまで満足しえるかということが重要になつてくる。

また、伴侶性といえば、「行動」と「人間関係」を共有する時間は、定年などのライフステージの変化が起きる前から互いに意識していないと持てるものではない。互いの趣味や人間関係などへ意図的にかかわるといった双方の働きかけが必要になつくる。これは、共に行動するか否かではなく、互いの別々の行動を尊重するにしても、ベースとなる信頼関係を「あ～うん」の呼吸に頼らずに、もう一度見直す必要があるということである。

シニア夫婦が互いに適度に満足しながらハッピーライフを送るためにには、このような「助走期間」が必要になつてくるといえよう。

そのいった人々が、夫婦2人世帯になつたときに、これまでの意識を変革してお互に向きあう意志を持つてゐるのだろうか。定年というわかりやすいタイミングがあるにせよ、そこまでは通常どおりの仕事生活を送ってしまいがちになるであろう。

「助走期間」 ハッピーライフに必要な

以上のことから、夫婦2人の生活になつたときに見直すべき点は、生活における「性別役割」と行動レベルの「伴侶性」である

参考文献

- ライフデザイン研究所
「高齢男性の夫婦関係—妻の目から見た夫の自立性—」1999年
- 岡村清子・長谷川倫子
『テキストブック エイジングの社会学』日本評論社 1997年
- 電機連合総合研究センター
『人生80年時代のライフデザイン』日本評論社 2000年
- 日本老年行動科学会
『高齢者の「こころ」事典』中央法規出版 2000年
- 木下謙治編
『家族社会学—基礎と応用—』九州大学出版会 2001年
- (財) ハイライフ研究所
『共立夫婦・Dinks から共立夫婦へ』日科技連 2001年
- ファンケル出版
『毎日が発見』28号、37号



シニアライフ分析からみる シニア像

HR-I社会研究部 吉澤 康代

ターゲットAの次に大きなグループとなっている。クラスターCは「現在の生活に不満で、将来を悲観」で回答者の15.1%、クラスターDは「現在の生活にやや不満で、将来樂觀」で3%という割合になっている。

「生活の満足度」と 「将来樂觀度」による 4つのクラスター

シニアライフ研究では、現在のシニアがどのような生活をしているのか、そして将来どのような暮らしを望んでいるのか、現在と将来のシニア像を探索することを一つの目的としてきた。ここでは、本調査で行われたアンケート調査(2000年8月)の結果をもとに、シニア(50~70代)をターゲット別に分析し、今と将来の暮らし方像を展望する。そして、高齢化社会に向けてシニアの望む暮らしをサポートするためにどのようなことが必要となるかを考える。

シニアのタイプ分けには「現在の生活満足度」と「5年後の将来樂觀／悲觀度」の2つの軸を用い、4つのクラスターに分けた(図1)。クラスターAは「現在の生活に満足で、将来やや樂觀」しているシニアで、調査回答者の42.3%が属している。クラスターBは「現在の生活にやや満足で、将来悲觀」で回答者の39.6%を占め、クラス

最も多いクラスターAは 引退者の多い高齢シニア

各クラスターがどのような属性のシニアによって構成されているのか、年齢、性別、就業状態の点からみてみる。図2から平均年齢をみると、いちばん高年齢なのがクラスターA、逆に最も若いのがクラスターDの58.3歳である。年代ごとの割合では、平均年齢の若いクラスターCとDで50代の割合が高い。平均年齢がいちばん若いクラスターDでは70代の割合が8.8%と最も少なく、平均年齢が2番目に若いクラスターCは60代の割合が若干低くなっている。

各年代の男女構成をみると、クラスターAとBは全体の構成比とほぼ同じ傾向である。クラスターCでは、50代男性の割合が多少高く、60代女性が若干少なくなっている。全体の構成比と比べて大きく異なるのは、クラスターDである。クラスターDでは、50代男性の割合が44.1%と高く、50代女性の割合が17.6%と低くなっている。対に60代では男性の割合が11.8%で、女

性が17.6%と高い。全体と比較して割合の小さい70代でも、男性の方が女性より低い。

就業状態では、クラスターDで「収入のある仕事をしている」が70.6%と最も多い。次にクラスターCの65.2%、クラスターBの60.6%が続き、クラスターAは58.8%と最も低い割合になっている。これは、クラスターの平均年齢と関連している。平均年齢が58.3歳と定年退職年齢に達していないクラスターDは、まだ働き続けている人が多く、定年退職年齢を超えているクラスターA(平均年齢が61.8歳)では、働き続いている人が少ない。

生活に満足、将来樂觀的な人々は、 豊かな生活をイメージ

シニアは自分の生活に対してどのようなイメージを抱いているのだろうか。また、そのイメージはクラスターごとに違っている

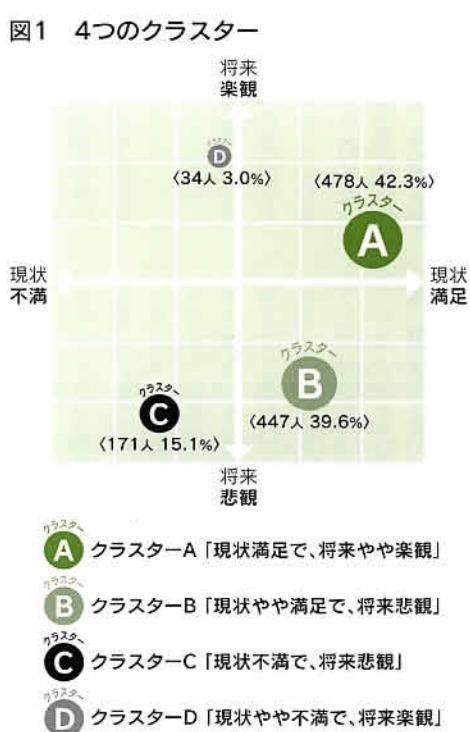
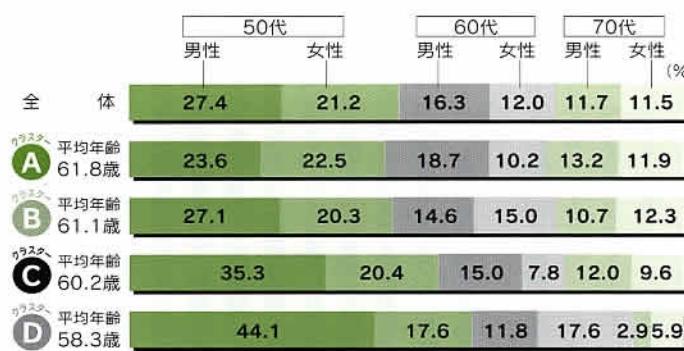


図2 クラスター別 男女・年代構成



のだろうか。生活のイメージを表す9つの指標を用いて、比較してみた。

図3は4つのクラスターごとに9つの指標の値を示したものである。全体の傾向としては「自分流に」「平凡に」「自然体」「文化的」に「堅実に」の値が低い。

4つのクラスター間を比較してみると、クラスターAでは「自分流に」「自然体」「心豊かに」「充実した」で値が高く、クラスターBとクラスターDは「平凡に」の値が高くなっている。また、クラスターCについては「自然体」「心豊かに」「自分流に」の値の低さが目立っている。



指標説明	指標を構成する単語								
	スマートに	文化的に	自分流に	平凡に	聖実に	充実した	心豊かに	自然体	
スマートに	洗練された／スマートな／リッチな／国際的な／伝統的な成功した／ハイテクを備えた／都会的な／変化のある								
文化的に		教養のある／文化的な／個性的な							
自分流に			のんびりした／気ままな／自由な						
平凡に				平凡な					
律を越えずに					努力する／がまん／堅実な／物を大事にする				
聖実に						素朴な／落ち着いた			
充実した						豊かな／安定した			
心豊かに							生きかいのある／楽しい／幸運な／交際の豊かな		
自然体								自然体の／自分らしい	

指標の作成：現在のあなたの生活は、次のどのイメージに重なりますか？の選択肢30単語のクラスター分析結果を参考に、30単語を特定の生活イメージを形成するよう分類し、その単語が選択された場合に「1点」、選択されない場合は「0点」とし、指標ごとに平均値（最高点を100に換算）を算出した。

図4 生きる張り合いを感じるとき

	A	B	C	D	(%)
1位	家族とともに過ごしているとき (54.3)	家族とともに過ごしているとき (54.8)	趣味に熱中しているとき (50.6)	仕事に熱中しているとき (52.9)	
2位	趣味に熱中しているとき (49.3)	趣味に熱中しているとき (48.3)	家族とともに過ごしているとき (46.5)	趣味に熱中しているとき (52.9)	
3位	仕事に熱中しているとき (40.0)	仕事に熱中しているとき (39.6)	ひとり気ままに過ごしているとき (44.7)	ひとり気ままに過ごしているとき (52.9)	
4位	気心の知れた友人と会っているとき (35.0)	気心の知れた友人と会っているとき (35.8)	仕事に熱中しているとき (44.1)	家族とともに過ごしているとき (38.2)	
5位	ひとり気ままに過ごしているとき (32.1)	ひとり気ままに過ごしているとき (35.6)	気心の知れた友人と会っているとき (38.2)	気心の知れた友人と会っているとき (26.5)	
夫婦で一緒にいるとき (32.1)					

クラスター間の違いは、「自然体」「心豊かに」「充実した」「自分流に」の項目で顕著である。これらの項目について、クラスターAが最も高い値を示し、次にクラスターBとクラスターD、最も低い値はクラスターCとなっている。「平凡に」「律を越えずに」では、クラスターB、C、DがクラスターAを若干上回っている。

つまり、現在の生活に満足し将来に楽観的なほうが、現在の生活について、自分なりの豊かな生活をイメージし、生活にあまり満足しておらず将来を悲観しているほうが、自分の生活は平凡でがまんや努力で成り立っていると感じているといえるだろう。

現在の暮らし

生活に不満のあるクラスターの生きがいは、家族以外に向かう

では、実際シニアはどのような生活を送っているのだろうか。クラスターごとに

「生きがい」「楽しみ」「心とからだ」「ゆとり」についてみてみる。

図4の生きがいでは、クラスターAとBはほぼ同じ傾向で、「家族とともに過ごしておらず将来を悲観しているほう」が、仕事に熱中しているとき」が上位に挙げられている。クラスターCでは「家族とともに

の割合が低く、「ひとり気ままに」の割合が高い。クラスターDは「仕事に熱中」「趣味に熱中」「ひとり気ままに」の割合が高く、「家族とともに」「気心の知れた友人」の割合が低くなっている。

生活に満足しているクラスターAとBは、生きがいの対象が家族という自分の最も身近な存在に向けられ、現状に不満を感じているクラスターCとDは「家族以外の世界」が生きがいとなっている。特に、クラスターCは「趣味の世界」、クラスターDでは「仕事と趣味の世界」に加えて「自分ひとりの世界」に向けられている。

生活満足派のクラスターは楽しみのバリエーションも豊富

楽しみについては、「暮らしの中で楽しみを感じるもの」「親しくつきあっている人

「行っている活動グループ」の3つの側面からまとめてみる。本調査では、「暮らしの中で楽しみを感じるもの（選択肢37）」「親しくつきあっている人（選択肢17）」「行っている活動グループ（選択肢10）」のそれぞれについて、選択肢の中から該当するものをすべて選んでもらっている。まず、楽しみの広がり、バリエーションはどれぐらいのかをみてみる。

図5は、楽しみ、親しくつきあっている人、活動グループについてクラスターごとに平均個数・人数をまとめたものである。どの点においてもクラスターAが高い値を示し、次がクラスターBとなっている。楽しみのバリエーションについては、現状に満足しているクラスターAとBのほうが、幅広いといえる。では、楽しみ方という点

図5 「楽しみ」「交流」「活動グループ」平均値

	A	B	C	D	全体
「楽しみ」個数／平均値(最大37個)	9.2	8.6	7.8	7.1	8.7
「交流」人數／平均値(最大17人)	6.1	5.9	5.2	5.8	5.9
「活動グループ」個数／平均値(最大10個)	1.7	1.5	1.2	1.3	1.5

本調査では「普らしの中で楽しみを感じるもの」「親しくつきあっている人」「行っている活動グループ」のそれについて、選択肢の中から該当するものをすべて選択してもらっている。図表の数値は、クラスターごとに選択された個数・人数の平均値。

図6 現在の暮らしの中の楽しみ

	A	B	C	D	(%)
1位 テレビ・ラジオ	75.4	テレビ・ラジオ	76.0	テレビ・ラジオ	69.4
2位 国内旅行	54.8	国内旅行	49.0	国内旅行	44.1
3位 家族の団らん	52.7	友だちづきあい	47.4	友だちづきあい	36.5
4位 友だちづきあい	49.6	家族の団らん	46.3	園芸・ガーデニング・日曜大工	35.3
5位 読書	43.1	園芸・ガーデニング・日曜大工	40.4	家族の団らん	34.1
					読書
					35.3

図7 現在親しくつきあっている人

	A	B	C	D	(%)
1位 子ども	88.0	子ども	87.3	配偶者	78.4
2位 配偶者	82.9	配偶者	82.8	子ども	75.4
3位 きょうだい	68.4	きょうだい	67.6	きょうだい	60.8
4位 趣味などで知りあった友人	51.4	地域の人	48.6	仕事関係の人	49.7
5位 地域の人	48.6	親戚・縁戚	48.6	地域の人	38.6
					仕事関係の人
					57.6

心とからだの健康が将来の見通しや孤独感に影響

Cはどの項目についても割合が低く、他と比較して交流があまり活発だといえない。クラスターDは4つのクラスターの中でも「子ども」を選ぶ割合が最も高く、逆に「配偶者」の割合が最も低くなっている。

交流についてみてみると、クラスターAとBでは「子ども」「配偶者」「きょうだい」を選択する割合が高い(図7)。クラスターCはどの項目についても割合が低く、他と比較して交流があまり活発だといえない。クラスターDでは「テレビ・ラジオ」の割合が低い一方、「園芸・ガーデニング・日曜大工」が高くなっている。

で、クラスター間に違いはあるのだろうか。図6は、楽しみとして選択された上位5項目を、クラスターごとにまとめたものである。各クラスターの特徴を挙げると、クラスターAは「国内旅行」と「家族の団らん」を選ぶ割合が高く、クラスターBは「国内旅行」「友だちづきあい」「家族の団らん」の割合が高い。クラスターCはどの項目についても選択される割合が低く、特に他のクラスターと比べて「家族の団らん」の低さが目立つ。クラスターDでは「テレビ・ラジオ」の割合が低い一方、「園芸・ガーデニング・日曜大工」が高くなっている。

交流についてみてみると、クラスターAとBでは「子ども」「配偶者」「きょうだい」を選択する割合が高い(図7)。クラスターCはどの項目についても割合が低く、他と比較して交流があまり活発だといえない。クラスターDは4つのクラスターの中でも「子ども」を選ぶ割合が最も高く、逆に「配偶者」の割合が最も低くなっている。

現在の暮らしの経済的ゆとりをみると、世帯収入500万円未満の割合が多かつたクラスターCにおいて、「ゆとりがない」「あまりゆとりがない」と「まったくゆとりがない」が71・8%を占め、反対に、世帯収入の高いクラスターA、B、Dでは、「ゆとりがある」「十分ゆとりがある」と「まあまあゆとりはある」が半数を超えている。

現在の暮らしについて、4つのクラスターの特徴を図8にまとめたので参照していただきたい。

独感は強いとはいえない。クラスターごとにみると、クラスターAが17、クラスターBが19、クラスターCが22、クラスターDが19となり、クラスターCで孤独感が強く、クラスターAで孤独感が弱いことがわかる。

暮らしのゆとりが生活の満足度を決める

全体では75・4%が「健康(非常に健康)と「まあ健康」であるが、クラスターBとCは、その割合が68・6%、62・7%と低くなっている。他方、クラスターAとDでは「健康」を選ぶ割合が85・9%、81・8%と高く、将来を楽観しているほうが、健康状態がよいといえる。

心の健康として「孤独感」についてみてみると、孤独感を測定する尺度(注)の平均値(4点が最高)をみると、全体平均は1.9で孤

独感は強いとはいえない。クラスターごとにみると、クラスターAが17、クラスターBが19、クラスターCが22、クラスターDが19となり、クラスターCで孤独感が強く、クラスターAで孤独感が弱いことがわかる。

将来の暮らし

シニアの高い就労意欲

では、将来どのような暮らしを望んでいるのか、「仕事」「望み」「家族と介護」の点からまとめてみる。

将来の仕事について、60歳以上になつても働き続けたいとする割合が、クラスター

Aで64.9%、クラスターBで63.4%、クラスターCは71.5%と高く、クラスターDは57.6%と低くなっている。

趣味やレジャーだけではないシニアの望み

現在の生活の中で「～したい」「～できたらしいな」と感じることをみてみると、全体としては「趣味や旅行などレジャーの充実」「体力をつけ、健康な心身づくりに励む」「知識や教養、技術を身につけるために学ぶ」「やりがいのある仕事に打ち込む」を挙げる人の割合が高くなっている(図9)。クラスターAは「健康な心身づくり」「知識や教養、技術を学ぶ」「助けあえる親子関係づくり」の割合が高く、クラスターBは「健康な心身づくり」「自立した生活能力を身につける」で高い割合を示している。クラスターCは「やりがいのある仕事」「自立した生活能力を身につける」、クラスターDは「知識や教養、技能を学ぶ」「やりがいのある仕事」「経験を生かした起業」で割合が高くなっている。

自宅でサービスを利用しながらの家族介護が希望

将来、シニアは家族とどのようなかわりを望んでいるのだろうか。10年後に一緒に住みたい家族としては、「配偶者」を選ぶ割合が圧倒的に多く、次に「息子の家族」を選ぶシニアが20%程度、「娘の家族」が15%程度となっている。「配偶者」については、クラスターA、B、Cで70%を超えており、が、クラスターDだけが57.6%にとどまっている。

将来、自分に介護が必要になった場合に希望する介護方法(図10)では、クラスターAとBが「自宅で、介護サービスを利用しながら家族に介護」が5割を超えて、「高齢者向け施設に入所」が2割強と、2つの方法に集中している。それに対して、クラスターCとDは「自宅で、介護サービスを利用しながら家族に介護」が4割程度で、希望する介護方法にバラつきが見られる。特に、クラスターCは他と比べて「高齢者向け施設」「病院」の割合が高く、施設派希望といえる。クラスターDは「自宅で家族だけに介護」「自宅で介護サービスを利用し、家族以外の介護」がそれぞれ15%と、バラつきが大きい。

「悠久自適」組と「まだまだ仕事人生」組

将来、希望する暮らしについて、各クラスターの特徴を図8にまとめている。10年後、ここに挙げた希望する暮らしは実現されるだろうか。「今の暮らし」から「将来、希望する暮らし」への流れを見比べてみると、「悠久自適の生活」を希望するクラスターA、Bと、「まだまだ仕事人生」を希望するクラスターC、Dに分けることができる。

悠久自適という点では、クラスターAとBの経済的なゆとりを将来どのように活用できるかがポイントとなる。趣味や旅行などのレジャーだけでなく、健康づくり、あるいは知識や教養を身につけたいという学びへの意欲をさらにかき立て、満たしていく多様なソフトが必要とされる。

図8 4つのクラスターの特徴



える親子関係を求めている。介護方法では「介護サービスを利用しながら家族の介護」を希望する割合が高いものの、このような良好な家族関係から、老後もできれば家族に面倒をみてもらいたいという気持ちが強いと考えられる。しかし、家族に大きく依存した介護は、逆に家族関係を悪くする可能性がある。そのため、クラスターAに対しては、助けあえる親子関係を壊さないような介護のあり方を検討する機会が必要といえる。

「まだまだ仕事人生」のクラスターC、Dでは、高齢期におけるやりがいのある仕事、職場をどのように提供していくかが課題となる。できることなら、シニアならではの、これまでの経験や知識を生かせるような働きの場がふさわしい。

クラスターDに関しては、60歳以降も働き続けたい人の割合が57・6%と4つのクラスター中、最も低いにもかかわらず、将来やりがいのある仕事に打ち込みたい人の割合が高いという矛盾が興味深い。これは、今までの経験や趣味のような好きなことを生かして事業を始めるなど、現在とは違った働き方を求めていると推測できる。したがって、クラスターDに対しては、単に就職先を紹介、提供するのではなく、シニア、ベンチャーニーに発展できるようなノウハウ、

なる。できることなら、シニアならではの、これまでの経験や知識を生かせるような働きの場がふさわしい。

知識の提供が必要といえる。

*

これまで、シニアを4つのクラスターに分けて分析を行ってきた。人々自適の生活による経済効果であれば、クラスターAやBに期待できるが、現役引退後の長い人生に新たな潮流をもたらすとすれば、クラスターDにその可能性があるといえる。経験

を生かした起業や学習意欲等、クラスターDが秘めるチャレンジ精神が、地域との何かわりや自らを社会に生かす発想によって、

(注)本アンケート調査では、孤独感を測る尺度として「改訂CLCA」(改訂CLCA)を用いた。各項目は4段階評価で測定され、因子分析結果、尺度作成には6項目を使用、その平均値を「孤独感」としている。6項目の信頼係数は0・7851である。

図9 これから打ち込みたい活動

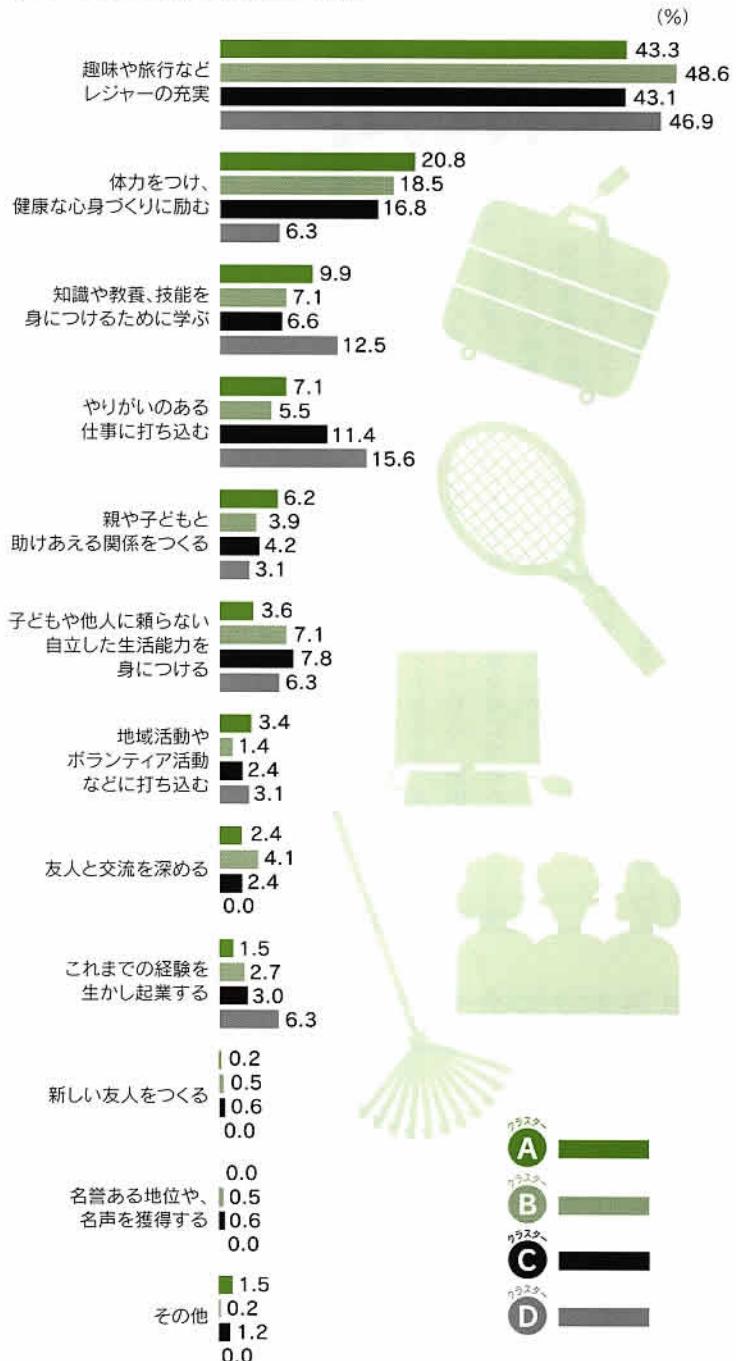


図10 希望する介護法(自分が介護を受ける場合)

